

作業上の危険をマンガで「見える化」し、 災害ポテンシャルを芽のうちに駆逐

協和建設株式会社は、空虚な「安全第一」を排し、残存効果やストーリー性の強いマンガを駆使して従業員の安全意識を掘り起こし災害ゼロを追求するとともに、現場周辺の住民の理解、協力も得ている。

協和建設株式会社・福岡県

協和建設では、リスクアセスメントをはじめ、KY活動、ヒヤリハット事例をストーリー性のあるマンガやキャラクターを活用して、社員の安全意識を喚起し、「見える化」することで社員全員が取り組みやすい安全活動を実施し、無災害記録を継続している。

社員の脳梗塞事故死が安全活動の原点

協和建設の安全活動の成果も一朝一夕になされたものではない。

実は同社では、平成8年に高所作業中に社員が脳梗塞を発症し、死亡するという痛ましい事故が起きた。その事故は、亡くなった社員や遺族に対する補償といった事後措置以上に、業務の多くが公官庁発注の工事であった同社の業務にも多大の影響を与えた。第一に、公共工事の入札からの指名停止がなされたからである。

この事故により、同社社長は労災事故に対してナーバスとでもいえるほど敏感になった。そして同社社長は、安全第一が声高に叫ばれる割には形式的で空虚になっているのはいか、また一般に、安全は結果ばかりに目を向けがちだが、工事完成までの安全プロセスこそが大切なのではないかと、その思いを深めるに至った。

それにまた、ツールボックスミーティングや指差呼称に終始している安全管理のメソッドでは進歩がないのではないかと、口頭での意識喚起だけでは安全意識は記憶に残りにくいのではないかと、それから、建設業にとって大切な地元住民に、何のためにどのような工事をやっているのか理解してもらえていないのではないかと、こうしたさまざまな考えや危惧心が芽生えた。



マンガを使ったKY活動



マンガを使った教材

オリジナルの
安全促進キャラクター
「あんぜんまもるくん」



あんぜんまもるくん

ところで、福岡県では、資源の再利用について、6コママンガで県民に啓発活動を展開し、展示物を作っている。それを見ると、廃棄資源をどう分別すればよいか、自然に頭に入ってくる作りになっている。同社社長は、これを安全活動に利用できないかと考えた。

折しも、同社社長のご息が5年前、マンガによる広告のマーケティングの会社を興した。これによって、マンガというツールが手近なものとなった。

こうしたことで、長い熟慮のすえ、同社社長は日常的な安全活動にマンガを組み込むことに踏み切ったといえる。

改めて考えてみると、マンガにはインパクトがあり、瞬時に見る人の興味を引きつけ、容易に安全意識を植えつけ、ストーリーがあって見る人を飽きさせない、読後の残存効果が優れているなど、多面的な効果があることに気づく。このため、同社社長はマンガやキャラクターを安全活動の随所に採用している。

マンガを利用してリスク低減措置協議書の作成も

第1はマンガを利用したKY活動である。一般的に見られる1枚だけのKYシートではなく、作業に応じたリアルなストーリーマンガによるKY活動を始めたのだ。1枚のシー

トを指し示して、これを見て土木建設の危険性を指摘しろといっても、社員の中にはなかなかその指摘ができない人がいるのも事実である。だが、ストーリーマンガを用いることで、その作業の危険性が理解でき、そのほかの危険性にも着目できる社員の育成にもつながっている。

第2に、マンガを使ったリスクアセスメントも行っている。工事に入る前に、関係スタッフが参加して、マンガ建設看板を利用して予想されるリスクを見積もり、それに基づくリスク低減措置協議書も作成している。

また、「あんぜんまもるくん」というオリジナルな安全促進キャラクターや、マンガ化した災害事例をヘルメットや重機に貼付して、日常的に危険意識を喚起したりもしている。さらに、現場作業員の安全確保と合わせ、近隣住民の理解と支持を得るべくオリジナルな啓発標識板も作成している。

第3に、リスクアセスメント、KY活動の実施状況について、作業員に対するアンケート調査を実施し、安全活動の取組の効果を分析する事で、安全活動の不足する部分の改善を継続している。

マンガKYであれば全員の安全意識を喚起することも可能

こうしたユニークな活動は福岡労働局や国土交通省の九州地方整備局、福岡県県土整備部でも注目している。同社社長は建設業労働災害防止協会福岡県支部の理事を務めており、平成24年6月には直方分会独自で安全シンポジウムを開催するなど、自社独自の取組みを核に、同業他社に対する横断的な展開にも力を入れている。

